

ペーター・フロイント 酒寄進一 訳

fantásien

ファンタジーエン

忘れられた
夢の都



ファンタジーエン
hantásien

江苏工业学院图书馆
藏书章

ペーター・フロイント

酒寄進一 訳

Peter Freund ペーター・フロイント (<http://www.freund-peter.de/>)
1952年生まれ。ミュンヘン大学で新聞学、政治学、社会学を学び、学生時代からフリージャーナリストとして活動。現在は、小説家、脚本家、映画プロデューサーとして活躍。おもな著書に『Laura』（末邦訳）シリーズなどがある。

酒寄進一 さかよりしんいち
(<http://www.wako.ac.jp/~michael/wiki/index.php?FrontPage>)
1958年生まれ。上智大学、ケルン大学、ミュンスター大学に学び、新潟大学講師を経て、現在、和光大学教授。児童文学を中心に、現代ドイツ文学の研究、紹介をおこなっている。おもな訳書に、『ファンタージェン 秘密の図書館』（ソフトバンク クリエイティブ）、『ネシャン・サーガ』『盗まれた記憶の博物館』（ともにあすなろ書房）、『ベルリン1933』（理論社）などがある。

ファンタージェン ^{わす}忘れられた^{ゆめ みやこ}夢の都

2006年10月10日 初版発行

著 者……ペーター・フロイント

訳 者……酒寄 進一

発 行 者……新田 光敏

発 行 所……ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂 4-13-13

営業 03(5549)1201

印 刷……文唱堂印刷株式会社

装 丁……丸尾 靖子

装 画……占部 浩

挿 絵……本田 あさき

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することを禁じます。
落丁、乱丁は小社にてお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-7973-2986-6

ファンタージェン



わす 忘れられた 夢の都
ゆめ みやこ

Originally published in German under the title
Die Stadt der vergessenen Träume
Copyright © 2003 by Peter Freund,
Asperg und AVA international GmbH, Autoren- und
Verlagsagentur, Herrsching/Breitbrunn (Germany)
Copyright für die deutsche Erstausgabe © 2003
Droemer Verlag, einem Unternehmen der Droemerschens
Verlagsanstalt Th. Knaur Nachf. GmbH & Co. KG, Munich
By arrangement through Meike Marx, Yokohama, Japan

もくじ

第 1 部 謎の〈呼び声〉

プロローグ サイード 2

1 セペランサノ

2 インソムニア人 20

3 アスミス長老 33

4 飛び交うわさ 47

5 夢狩り人 68

6 〈凍てつく風の山脈〉 86

7 九十九の広間がある文書館 102

8 雪崩小人 124

9 山の洞穴 135

10 千の燭台 しよくだい
152

第2部 夢に生きる ゆめ

11 闇の中の男 やみ
172

12 古い記憶 きおく
188

13 鬼火のシンジタマエ おにび
205

14 翅のある怪物 はね かいぶつ
223

15 醜悪族 しゅうあくぞく
236

16 消えた本
251

17 雲紡ぎ くもつむ
269

18 飛ばしすぎ
288

19 コントラリオ
307

20 フィロニウス・フィリップ・ファンタストウス
322

21 — オプ
タ
ソ
ム
ニ
ア
人^{びと}
343

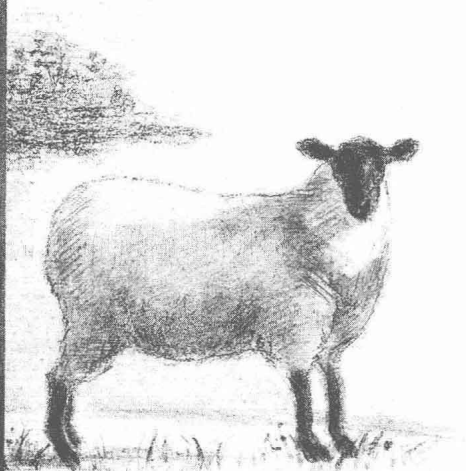
22 — 雲^{うん}
母^も
の
絵
361

エ
ビ
ロ
ー
グ
368

訳^{やく}者^{しゃ}
あ
と
が
き
370

第 1 部

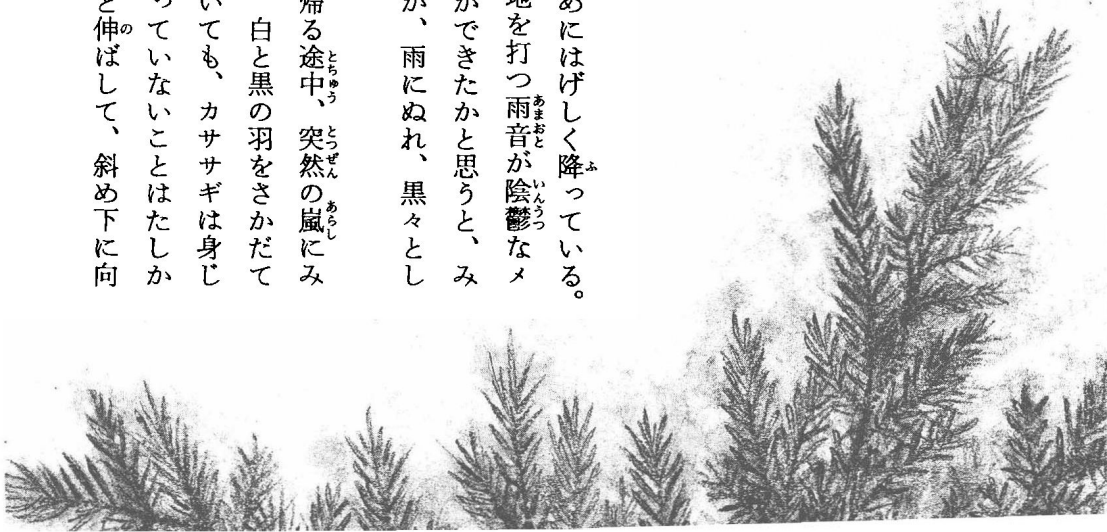
なぞ よ
謎の〈呼び声〉



プロローグ—サイーデ

もくもくと黒雲が天空に広がった。太い鉛筆で描かれたような大粒の雨が斜めにはげしく降っている。たそがれを切りさく最初の稲光。雷鳴がファンタジーエン国にとどろき、大地を打つ雨音が陰鬱なメロディーを奏でる。ぬかるんだ荒れ野に降りそそぐどしゃぶりの雨。水たまりができたかと思うと、みるみる大きく深くなった。怖れを知らぬ衛兵のように荒れ野に立つ杜松の茂みが、雨にぬれ、黒々とした姿を見せていた。

茂みの中でもとくに背の低い杜松に、一羽のカササギがとまっていた。巢に帰る途中、突然の嵐にまわれ、茂みに逃げこみ雨宿りしていたのだ。一番下の枝で小さくちこまり、白と黒の羽をさかだてて水をはじきながら雨足が遠のくのを待っていた。稲光が走り、雷鳴がとどろいても、カササギは身じろぎ一つしなかった。だが黒いボタンのような目がきょろきょろしている。眠っていないことはたしかだ。すると急にカササギがびくりと動いた。首を引っこめたかと思うと、さっと伸ばして、斜め下に向



けた。地面をしきりに気にしている。

雨が根もとの土を洗いながし、褐色の根の間で何かがきらつと輝いたのだ。小石か何かのかけらだらうか。それとも、とぐろを巻いた蛇か。ふたたび稲光が走ったとき、地面で光ったものが何かわかった。帯だ。カササギはさつと枝からとんで、帯のそばに舞いおりた。

その帯はいくつもの小さな節が鎖のようにつながっていて、節の部分も留め金も透きとおったガラスでできていた。カササギは何度も首を伸ばし、そのふしぎな帯をくちばしでそととつつき、口にくわえようとした。帯の長さはカササギの十倍はあるが、楽にくわえあげることができた。だがいきなり口を開けて帯を落とすと、カササギは首を高くあげてうれしそうにさえずった。

どしゃぶりの雨がようやくあがった。カササギは空を見あげ、羽についた水をはじきとばすと、あらためて帯をくわえ、荒れ野を覆うたそがれの空に向かってとびたつた。

眼下の大きな土手のふもとに大軍団が結集していたが、カササギはかまわずその上をかすめるようにとんだ。軍団は数日前からそこでじつと立ちつくしている。巨大な黒甲冑を身につけた徒歩の者や騎馬の者。この奇妙な軍団にはじめて気づいたとき、カササギは興味を引かれ、ずいぶん目をきよろきよろさせたものだが、今では見慣れた風景になり、沈黙している戦士たちになんの関心も寄せなかった。くれなずむたそがれの中、カササギは姿を消した。そして、ファンタジーエンのたいなる謎だと歴史家が考える、新たな伝説が誕生する瞬間を見逃した。歴史家たちの中には、ここで起こったできごとのせいでファンタジーエン史を新たに解釈しなおすべきではないかと悩み、いつそのこと矛盾して見え

るいくつかの事件を併記して、後世の人びとの解釈にゆだねるべきだとする者もいる。いまだに歴史家たちの考えはまちまちだが、一つだけ意見が一致していることがある。事件はまちがいなくここに書かれたとおりに起こったのだ。なぜなら、ファンタジーエンで起こったことを書き記すことができるのは、さすらいの山の古老だけであり、古老が書き記したことのみに起こるからだ。

それは、たそがれが夜と結ばれたときに起こった。もやが立ちのぼり、かつてみなから怖れられた軍団を包みこんだ。甲冑巨人たちの輪郭はじわじわ闇に溶け、雲間が切れたときには、その姿はまったく見えなくなっていた。風がそよとも吹いていないのに、逃げまどう馬の群のように雲は流れ、やがて空が晴れて、うっすらと新月が顔を見せた。甲冑巨人たちの足もとにできた水たまりだけが星明りを映して白く光って見えた。突然、ぬかるんだ大地で何かがうごめいた。じわり、じわりと。そこに見えるのは頭じゃないか。待て、地面から今もありあがったのは肩だ。まちがいない。大地から産みおとされるように細い人影が身を起こし、すつくと立ちあがった。

若い女だ。全身泥だらけで、一瞬、身を堅くし、しめった空気を吸いこんだ。それから伸びをして体をまわし、かつて家来であった黒甲冑の戦士たちのほうを見た。不敵な笑みを浮かべ、赤と緑の目を光らせ、天をあおぐと、両腕を高々とあげ、大声で叫んだ。飢えた野獣が狩をはじめるときに雄たけびのようだった。叫び声を聞いた生きものたちはみな、おびえて身をちぢこまらせた。そんな恐ろしい叫び声をあげられるのは、ファンタジーエン広しといえども一人だけだ。闇の女王サイーデ。

サイードは自分が引き起こした恐怖^{きようふ}を体で感じた。おののきは見えざる波となつてファンタージェンに広がり、しだいしだいに大きな波動^{はどう}となつた。サイードはふたたび勝ちどきをあげた。

「計画はうまくいった。みな、まんまとだまされたな。アトレーユ、フッフル、ヒスバルト、ヒドルン、ヒクリオン。みな、愚^{おろ}か者じゃ！ わらわがバスチアンをとり逃がし、甲冑巨人たちに踏^ふみつぶされたと思ひおつて」

バスチアン・バルタザール・ブックス……ファンタージェン国^{こく}を虚無^{きよむ}から救つた人の子だ。バスチアンは今ごろ、外国^{とくこく}にもどろろとしてゐるだろう。サイードの支配^{しはい}から脱^{だつ}してはいたが、完全に逃げきつたわけではない。いずれそのことを思い知るときがくる。

「なんと愚かなやつらめ！ わらわがあのようにあつさり負けを認^{みと}めるはずがなからう。あやつ^{ともがら}の者ら、ほんとうにわらわが死んだふりをしてゐることに気づかなかつたのか？」

サイードは一瞬^{にが}、苦いものを感じた。

「愚か者ども、人の子の裏切^{うらぎ}りが何をもたらすか、わらわがそのようなことも知らぬと思つておつたのか？ だれ一人、わらわのもくろみに気づいていなかったのか？ だが、バスチアンが人の子の世界にもどるための道は一つしかないことを、みな知つていたはずじゃ。わらわがそれを許^{ゆる}すと思つておつたのか？ それとも、わらわの死んだふりにまんまとだまされて安心しておるのか？」

サイードは思わずにやりとした。何もかも計画どおりのようだ。あの人の子は、仲間^{なかま}たちと変わらな

い愚か者だ。知らずにわらわのしかけた罠^{わな}にかかるだろう。次はもう逃げられまい。バスチアンはわら

わの意志に従う道具と化し、わらわの完璧な勝利を助けるのだ。またしてもサイードの勝利の叫びが夜のしじまにひびきわたった。うっすらと空に浮かぶ新月を見あげた。そろそろあの者たちを呼ぶころ合いだ。

闇の女王サイードはしずしずと荒れ野を歩き、カシの木立に近づいた。そこで立ちどまると、林のはずれを見つめ、満足そうに笑みを浮かべた。

木立の影に、どす黒い塊が現れ、五つの人影に姿を変えた。はじめは輪郭しかわからなかったが、やがて姿がはっきりとしてきた。背の高い人影、いや一人だけ小柄だ。五人とも、夜の闇で編まれた長いマントで頭からすっぽり体を包んでいる。マントの下に足がのぞいて見える。頭巾の中の目があるはずのところは緑色の炎が見え、喉の奥からしぼりだすようなうなり声が荒れ野にひびいた。

闇の女王サイードは、ふたたび小さな口をゆがめてうすら笑いをした。サイードが腕をあげると、五人の人影が駆けだした。彼らにことばはいらない。夢狩り人には、わざわざ使命を思いださせる必要もない。サイードと夢狩り人は大昔から手を結んでいた。そして彼らはファンタージェンで獲物を狩り、次の満月の夜、その獲物たちを人の子の世界に引いた。そうやって人の子の世界へいった者たちは悪夢となる。これまで何度となくしてきたことだ。

闇の女王サイードは駆け去る夢狩り人を満足そうに見送った。彼ら黒き生きものたちは、サイードに仕えるようになってから一度として手ぶらでもどってきたことはない。今度も抜かりはないはずだ。

1—セペランサ

セペランサの広場の市は、人でごったがえしていた。買い物客や野次馬が、都の中心にある大きな広場にとろ狭しと並んだ屋台に群がっている。屋台にかかった色とりどりの天幕がそよ風にゆれて、日の光とたわむれ、広場を囲む家々の緋色や銀色のスレート屋根も、午前中の光を浴びて輝いている。あちこちで、色鮮やかな服に身を包んだ人びとの陽気な笑い声や大きな声が聞こえた。ファンタージエン中のさまざまなことばがとび交っている。〈草海原〉産の緋おどし野牛ハムと草パンを売る屋台。ヘハウレの森産の夢の樹液、夜茶を並べる店、〈銀の山〉産の泉の水を売る店。〈歌う木の国〉産の朝露を安売りしている屋台には数十人の女たちが行列をつくっている。その朝露を肌数滴ぬれば、数年は若返り、女はだれでも美しく輝くという売り口上だ。ほんとうかどうかなんの保証もないが、朝露はとぶように売れ、店主は大忙しだ。

隣の屋台にも人だかりができていた。鬼小人、改面、おぞけふるい、腰抜かしといった連中が、へな

らず者地方の産のびっくり豆や怒り根、身ぶるい草を買い求めている。セペランサではだれもこわがることはないが、いつかまた人をおどかすことができるようになるかもしれない。それで彼らはそうした材料をしこしこ買い集め、ぞっとする味のぞぞぞ料理で精進しているのだ。

けれどもサラニーヤは、その恐ろしい連中を見かけても、少しもこわいと思わなかった。まだ夏を十
二回経験しただけの金髪きんぱつのやせた少女だが、外見がどんなに恐ろしくても、実はとても気のいい連中だ
ということを知っていた。赤い服を着たサラニーヤは平気でその行列のそばを通った。お使いはほとん
どすんでいた。右腕みぎうでにひっかけた、柳やなぎの枝でつくった籠かごは買った物でいっぱいだ。あとは、お日さまシ
ロップのびんを買うだけだ。これだけは絶対に買い忘れないでね、と母親から口をすっぱくしていわれ
ていた。お日さまシロップというのは、古くからファンタージエン国に伝わる薬で、悲しみや嘆きなげやつ
らさで落ちこんだときによく効くという。星みがきの親戚しんせきにあたる雲畑うんはたの農夫が空の最も高いところに
ある雲畑でしぼったもので、その秘伝ひでんの製法せいほうは門外不出もんがいふしゅつとされている。このシロップは一日一回スプー
ンにひとさじなめれば十分。それ以上なめると、今度は浮うかれさわぎ、いかれたことをやらかす場合が
あるので注意が必要だ。

サラニーヤは、まだ一度もお日さまシロップを試してみたことがない。母親のラーヤも、サラニーヤ
の知るかぎりなめたことがない。お日さまシロップが必要なのは、父親のアスミスだけだ。アスミスは
都みやとの重責じゅうせきを担になっているので気がめいることがよくあるからだ。ちなみにアスミスはセペランサの参事
の一人で、最高位の長老でもある。責任重大せきにんじゅうだいな役職やくしやくだ。ときどき景気けいきづけが必要なのも無理はない。

お日さまシロップを売る屋台は、広場に一つしかない。ザラフィンという名の行商人の店だ。ザラフィンはファンタージエン中を旅してまわっていて、セペランサの市には月に一度しかやってこない。いつも広場の中央にそびえる大理石の大きな柱のそばに店を構える。その柱は都の伝説的な創設者へ眠れるモルフェウスへの記念碑だ。

サラニーヤが柱のそばまできてみると、なぜかザラフィンの屋台が見あたらなかった。いつもなら虹色の天幕をはっているのに、屋台は遠くからでもよく見えた。サラニーヤはきよろきよろとあたりを見まわした。もう夏を三度めぐる間、母親のお使いをしている。これまでザラフィンが決まった日にこなかったことはない。買い物にくるたび、「ご両親によろしく」といつてくれるやさしいザラフィンに何かあったんだろうか。

大きな柱のそばに人だかりができていた。みんな、いらいらしながら、ザラフィンがやってくるのを待っている。その中には、隣に住んでいるグリスおばさんもいた。

サラニーヤは、白髪頭に黒い頭巾をかぶったおばさんのそばにいった。おばさんは頭巾と同じ色の丈の長い服を着ている。

「グリスおばさん、何かあったの？」

おばさんは一瞬きょとんとした顔をしたが、声をかけてきたのがサラニーヤだとわかると、にこっと笑った。

「あら、あんただったのかい。ごめんね。考えごとをしていたもんだから」